

## 運河と暮らし

国際港横浜に張り巡らされた運河岸には様々な産業が拠点を置きました。最大の貿易品であった絹関連産業、染物、製茶、材木、紙器、焼物など関連する商店の倉庫や店が川沿いに立ち並ぶようになります。多くの商店は、運河群を使った舟運を活かし川は様々な舟で大変にぎわいました。現在も当時から運河を活用していた「材木店」が運河沿いで当時の面影を残しています。



運河と港を繋ぐ舂（はしけ）が活躍

## 階段護岸



階段護岸（雁木）の痕跡（現在：大岡川桜橋）

川を有効に使うために川岸には階段状の護岸が多数整備されていました。運河全盛期には80以上の階段護岸（雁木）が整備されました。現在その殆どが廃止されていますが、大岡川に痕跡を確認することができます。また、この階段護岸の形状を活かした新しい桟橋も水辺のアクティビティ拠点用に整備されています。

## 震災と復興

横浜も関東大震災（大正12年）によって甚大な被害を受けます。関内外エリアの大半が焼失し、運河に架かっていた橋も失いました。昭和初期までに、復興事業が行われ運河と陸を繋ぐ多くの橋が震災に強い復興橋梁に架替えられました。現在も現役の復興橋梁も多く当時の姿を今に残しています。橋梁の四隅にデザインされた「親柱」や欄干のデザインにも注目してください。



現存する復興橋梁（吉野橋）

## 運河消滅



吉田川運河から大通り公園へ

港が時代とともに変化し運河活用も減少することでその役割を終えることになります。大岡川内側の運河群が消え、公園や道路に変わります。また同時期には横浜の中心市街地を繋いでいた市電網も廃止され消えていきました。活躍していた運河は一時期人々の関心を失い臭く汚い存在として厄介者扱いとなった時期を迎えます。汚れた川を蘇らせようという活動が流域で活発になり、多くの人々の手で清らかさを取り戻しつつあります。

## 大岡川ってどこ？

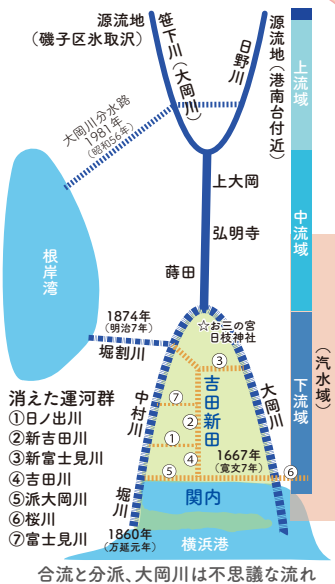
大岡川は、磯子区円海山南川の水取沢付近を水源地とする延長約14km、流域面積約35km<sup>2</sup>の2級河川です。日野川と笹下川（大岡川本流）が「関の下」付近で合流、上大岡、弘明寺、蒔田を経て、南区山王付近で運河となり本流と中村川に分流、中村川は堀川となり横浜港へ。戦後完成した分水路が上流域に完成。下流域には明治期に開削された堀割川が根岸湾に注いでいます。模式化すると対称形をした不思議な流れとなっています。弘明寺付近まで海水（塩水）と河川の淡水が混じり合う汽水域で、多様な生物が生息しています。



大岡川河口



弘明寺飛石



合流と分派、大岡川は不思議な流れ

## 運河イベント

### 横浜の運河を繋ぐ、楽しむ、競う！

大岡川運河によって街と街が繋がり、関内関外地区がひと繋がりになって開催するイベント「よこはま運河チャレンジ」は、水上交通や食の市、音楽ステージ、水難救助訓練など、運河を通じて横浜の魅力を発信しています。毎年3月上旬に大岡川～中村川～堀川のコースを使って「横浜国際SUPマラソン」22キロが開催されます。国際色あふれる150名を越す選手が運河をSUPで漕ぎ競います。魅力的で住みやすい横浜を目指して、幅広い活動に取り組んでいます。



よこはま運河チャレンジ運河パレード



横浜国際SUPマラソン



演橋チャンネル



運河に色を添える  
カナルちゃん

はまはしかい 検索

●発行：よこはま都市部水上交通実行委員会  
●編集：kadono design NODE・河北直治事務所  
●協力：NPO法人HamaBridge演橋会・株式会社オクトプランニング&デザイン  
●アートディレクション：Camp 松田純一 ●発行日：2025年3月



# 知ろう運河のこと

横浜は大岡川が海とつながる水辺に生まれました。今から約370年以上前、海が深く陸地に入り込み、入り海沿岸の村々では漁業や製塩、農耕が行われていました。この入り海・外海の間の砂州一帯に「横浜村」がありました。横浜運河物語はこの入り海と湾岸の横浜村と村々が舞台です。

## 運河の誕生

大岡川運河は江戸時代に最初の変化が生まれます。入り海の大半を干拓して水田とする新田事業が江戸の商人吉田勘兵衛によって成し遂げられました。吉田新田の誕生です。総規模568,000坪、新田の広さは350,000坪にも及びます。この事業によって新田と入り海の間に2つの人工河川＝運河が登場します。新田の完成によって稲作はもちろん、新しい道の誕生が対岸の交流を深め下流一帯が東海道保土ヶ谷宿を支える天領の村々としてその後200年の歴史を刻みます。



幕末の大岡川河口付近

## 開港の舞台



幕末「御開港横浜之図」一部を加工

外海に面していた横浜村一帯に大きな事件が起こります。日本が大きく変わるきっかけとなったペリー艦隊来港による外交交渉と開港の舞台となったのです。横浜開港が決定し、現在の関内一帯の半分が外国人居留地、また半分が日本人街として短期間に整備されることになりました。貿易港＝開港場の誕生です。それまでここに暮らしていた村民の多くが近くに移住し後の元町（元村）が誕生し、東海道と開港場を繋ぐ横浜道が整備されました。★外国人居留地には関所が設置され、関所の内側を「関内」その外側を「関外」と呼び、地名ではありませんが、現在も駅名や地域名として残っています。

## 近代運河の誕生

開港から10年で明治時代となり日本が近代化する中、横浜は国を支える貿易港として急発展を遂げます。港町が関内から関外へと拡大する中で多くの運河群が明治期に整備されました。運河の街が横浜に誕生します。地域を繋ぐ運河群は川岸に舟運を活かした産業が集積します。途中震災・戦災・接収という苦難を乗り越え戦後まで港の歴史を刻んでいます。

震災復興後の関内外運河図

